

年祭活動2年目



1 教会2名以上の初席者を



真朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

謹賀新年

立教百八十七年 元旦

芦津大教会

立教187年の新春、明けましておめでとうございます。旧年中は年祭活動1年目の年として、「動く」ことを意識しながら、共に時句の歩みを進めさせていただきました。お互いに時句に相應しい動きができたかを顧みて、今年は動きを継続し、加速していきたいと思っています。

さて、昨年の秋の大祭で真柱様は、これからの歩みの指針というべきお言葉を下さいました。「どんなことが起こっても諦めることなく、丹精し続けられたことも、教祖のひながたである」とされた上で、「一人でも多くの人を、この道に引き寄せさせていただく努力」と、「その人たちが道具衆の自覚を持って、教えを実行するようになるまで辛抱強く心を掛けていくこと」を求められました。

更には、一旦休憩しているようばくも、一人でも多く目を覚まして動いてくれるように、その働き掛けも促されたのです。これは「陽気ぐらしに向けて世界一れつをたすけるためには、大勢のようばくが必要である」との親神様の思召にお応えする以外のなものでもありません。「一人でも多くの人をこの道に導き、一人でも多くのようばくを御守護頂く」こと、そのために諦めることなく辛抱強く丹精し続けることが、百四十年祭への私たちようばくの仕事です。

今年は、「1教会2名以上の初席者を御守護頂く」を目標に掲げました。にをいがけ・おたすけに、修理丹精に、根気よく粘り強く取り組んで、をやの思いにお応えして、今年を充実した一年にさせていただきます。

大教会長 井筒梅夫

立教百八十七年の新春を迎え

おめでとうございます

井筒ふみ子



「漁夫の生涯竹一竿」

私の好きな言葉です、座右の銘とするところです。

漁夫は釣り竿一本を頼りに、穏やかな海へ、荒れた海へと躍り出て、漁を楽しみ生き甲斐として、その生涯を通ります。

私たちがようぼくは、教祖から頂戴したおさづけを頼りとして、勇んでたすけ一条の道を通らせていたからです。

昨年暮れ、私は大教会史編纂のお手伝いも終えまして、新しい年は、おたすけ一筋に通らせていたくと心に決めました。不思議なものです、神前でお誓いをして階段を下りてくると、不意に見知らぬご婦人から声を掛けられて、身上の相談を受けました。翌日、詰所まで来られて、心ゆくまでご相談が出来ました。教祖は私の心定めをお受け取りいただいたものと、勇んでおります。

教祖八十年祭の時は海外布教が打ち出されました。八十年祭には台湾から洪金湯さんが、房子夫人の父母を尋ねて初めて日本を訪れ、おぢば帰りをしました。前大教会長様はこの旬に台湾布教に出ると定めて洪さんと話し合われ、翌年、私と今川保男役員を連れて台湾布教に出られました。未だ台湾伝導庁も無くて、大陸

からの共産党化に神経をとがらせていた時で、公然と神様の話は出来ないのですが、台湾の人は親しみをもって神様の話を聞き入れてくれました。

その後、私は度々台湾へ布教に行きました。親神様は人間世界創造の元の神・人間世界を生かして下さる実の神様であることを懸命に伝えていました。台湾にも「マソさま」という神様があるという感覚があったからだと思います。

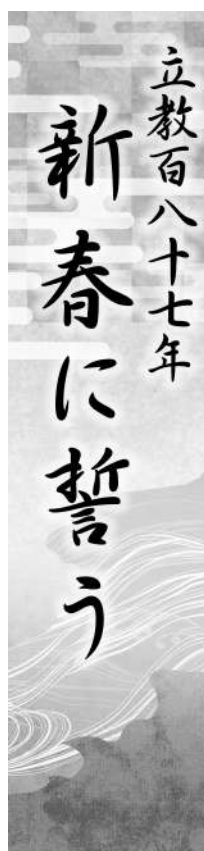
そのような時、陳樹蘭さんという婦人が、3歳の聾啞者の甥を連れて来て、「この神様はこの子を助けますか」と尋ねてきました。「たすけてくださいます」と断言して、人を救ってわが身救うことを説き、おさづけを取り次がせていただきました。次に台湾に行ったとき、その子は音のする方を振り向くようになり、その次に行ったときは言葉を話すようになって、おさづけでたすけて頂きました。

この節、このおたすけから、台湾に教祖の教えが、たすけ一条の道が真に根付いていったと思います。その後、洪金湯さんは真明彰化教会を、陳樹蘭さんは真明新堂教会の名称の理を拝戴されました。

おさづけこそ、私たちおたすけ人の背中を押して下さる、温かく大きな教祖の親心でございます、私たちようぼくの追い風でございます。私たちは教祖にお凭れして、おたすけに一步踏み出せば良いのです。

大教会では本年「1教会2名以上の初席者を」と目標が定められました。誰かがする、皆でするのでなく、「私がさせていただく」と心定めて努めさせていたかどうかではございませんか。

どうか本年もよろしく願っています。



地域に根差す教会を目指して



芦ノ郷分教会長
榎 康紀

昨年、年祭活動1年目の目標として、大教会より信仰実践に「動く」ことをお打ち出しいただき、思考錯誤しながら通る中に、昨年の4月から、教会の近くの公園の防災倉庫で、地域の子供の居場所づくりと地域の方々の交流の場になればと、妻が責任者となり、「たつま地域食堂」を毎月1度開催することとなりました。

毎月夫婦で内容を相談し、開催する中で、地域の高齢者や協力してくださる自治会の方、子育て世代の方と接する機会が増え、「榎さ

んのおかげで毎月の楽しみができました」と言ってくださる方もでき、夫婦で喜ばせてもらっています。

私の教会は、35年前に今の地に移転しました。今の場所は、山間部の小さな集落で、皆知り合いのような所ですので、移転した当初は天理教の教会がきたというところで、警戒されるような方もおられたことだと思います。

その中、父や母が自治会の役を積極的に務め、バス停や公園などの清掃ひのきしんを懸命に続けるなど地域に根差す教会へとなるよう努力し続けてくれたおかげで、今の喜びがあるのだと思います。

論達第四号に「教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通り、私たちへとつないで下さった。そ

の信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。」とありますように、私も親々の信仰を受け継ぎ、この地域食堂を一つのきっかけとして、地域に根差す教会を目指し、親神様からお与えいただいたこの場所、本年も信仰実践に動き、喜びの種を蒔いていきたいと思っています。

親から子、子から孫へ



日高分教会長夫人
花岡由紀子

天理教を全く知らない私が主人と結婚して32年が経ち、今回で3度目の年祭活動を迎えます。

初めての年祭活動は大教会での伏せ込み中で、何も分からずに過ぎていき、2度目は自教会で迎えたのですが、6人の子育てに精いっぱいの日々でした。

3度目を迎える今回は、大教会の当番や月次祭のお役を勤めさせていただく立場となり、今までとは心構えや受け取め方が違うように思います。

私事ですが、昨年7月から長女が2人目の出産で里帰りをしており、その間娘は孫と一緒に神殿掃除をしていました。予定日を1週間過ぎ、促進剤を打つての出産となりましたが、分娩は20分もかからず、安産の御守護を頂いたことにありがたい思いでいっぱいでした。

多くの情報が溢れさまざまな影響を受けて育った今の若者に、たとえそれが我が子でも、教会に生まれ育ったとしても、私にとって信仰を伝えることは簡単ではありません。



ません。

しかし、母親になった長女が、事あるごとに私に相談をしてくるようになった今、アドバイスはお道の心の使い方を分かり易い言葉で伝えるよう心がけています。すぐに理解できなくても、何年後かに「あのとき母が言っていたのは、こういうことだったのか」と感じてくれる事を期待しています。

「まず身近なところから」それは私にとって、やはり家族なのかなと思うのです。

今年1月から会長が修養科一期講師のご用で、3カ月間教会を留守にします。その間一度も教会に帰ってこない事に不安を感じますが、会長が帰ってきたとき、少しでも成人したと感じてもらえるよう、教会の御用を懸命に勤めたいと思っています。

たすける旬、たすかる旬に

11年前、教祖百三十年祭の年祭活動に入る前、私はあるご夫婦と出会いました。

お話を聞くとそのご主人は、いろいろな病気であまり歩くことが



島長分教会長
山田大幸

できず、また、娘さんが半身不随のため入院しているとのことでした。教会の月次祭に毎月参拝してください、教祖130年祭の旬にご主人はようばくとなり、娘さんにおさづけを取り次ぐまで成人をお見せいただきました。しかしその3年後、奥さんが出直すという節をお見せいただきました。

3か月前に父が出直し、教会長のお許しを戴いたばかりで戸惑っていた私にご主人は、「なっってくるのが天の理やろ。前向きに考えましょう」と明るく言葉をかけてくださり、逆にたすけていただきました。

昨年の11月、その奥さんの五年祭を勤めた折に、娘さんが杖を突いて一人で歩けるようになる御守

護を見せていただきました。

教会長として初めての年祭活動2年目を迎え、「たすける旬、たすかる旬」に一人でも多くおぢばにお帰りいただけるよう、教会一丸となっておたすけに邁進していきたいと思います。

温かい心で人を導きたい

夫である前会長が出直し、大教会長様から「会長の後任をしていただけますか」とのお言葉に、私は「はい」と素直に返事をしておりました。



照南分教会長
瀬戸山眞美

それから1年の間にいろいろと準備を進める中で、会長としての自覚を感じさせていただく毎日を経験しておりました。

今年、三年千日の2年目に入り、大教会より「初席者2名以上の御守護を」という目標を立てていた

できました。今まで教会の委員部長としての役目も何もできていませんでしたので、この目標を達成できるか分かりませんが、就任奉告祭の際に大教会長様から「教会に來たとき、また行きたいという雰囲気をつくって、陽気ぐらしを感じられる教会になつてほしい」

「親神様の御守護をありがたいて感じて、御恩報じの心を養い、成人の道を歩んでほしい」とのお言葉を頂きました。

温かい心で人を導き育てながら、御恩報じの道をしっかりと次の世代に繋げられるよう、精いっぱい勤めさせていただき、親々に喜んでもらえるよう、三年千日の2年目を、目標に向かって日々勇んでつとめたいと思います。



《11 月月次祭 挨拶》

根気よく辛抱強く

旬の御用に励ませていただくこう

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃は年祭活動の上にお励みくださいます、誠に苦勞様です。こうして大教会へお参りをいただきまして、共に 11 月の月次祭を恙なく、勇んで勤めることができましたことは、大変ありがたい次第です。

10 月 26 日の本部大祭の神殿講話では、昨年の論達ご発布以来、1 年ぶりに真柱様のお声を直接聞かせていただくことができました。本当にありがたいことでした。神殿上段から、ゆつくりとしたご口調で、囁んで含めるように私たちにお言葉を下さいました。このお言葉の中で、私の胸に刺さったと言いますか、思案と反省を求められた一節があります。

教祖のひながたの中から、ある場面を取り出して、それを参考に道を通るお手本とすることが、ひながたの辿り方の一つであり、それはそれでよしとされた上で、続いて、

まず教祖は、五十年の間、どんなことが起こっても諦めることなく、丹精し続けられたということを、これもひながたとして忘れてはならないのではないかと思う……

と仰せられました。私はこのお言葉に大いに考えさせられました。私自身今までを省みても、これをするには良いことだからと考へ、時には心定めまでして取り組むことがあります、しばらく

やってみてなかなか難しいと思ひ至れば、これを一旦横において、新たなことを考えて取り組む、といったことがしばしばありました。これは、よく言えば俊敏で腰が軽く、発想が柔軟であると言えますが、裏を返せば、根気がないということになります。私の場合はどうも裏を返したほうが強いのかもしれません。諦めずに丹精し続けるという教祖のひながたを、改めて学ばせていただくねばならないと、大いに反省をいたしました。

月日のやしろとなられた教祖の言動は変わってしまい、しかも人々が見たことも聞いたこともない神様の教えを伝えようとなさるわけですから、周囲の人たちが理解を示さないのは無理からぬことです。しかも理解をしないだけではなく、教祖を嘲り笑う者もありました。やがて、をびや許しを道明けに不思議なたすけが次々とあがって、教祖を慕う信者が増えていきましたが、その一方で山伏や修験者、僧侶たちが度々と乱暴狼藉を働き、官憲からの厳しく激しい干渉や迫害を受けるようになられます。

教祖の 50 年の道すがらは、人の目から見れば辛く厳しい苦勞の道なのですが、教祖の御心は、そんな者でもたすけてやりたい、世界中の可愛い子供をたすけてやりたい、陽気ぐらしへと導いてやりたいとの一貫した親心です。この一貫した親心で、どんな苦勞の中も諦めることなく、根気よく丹精をし続けられて、親神様の思召のままに歩まれたのが、教祖のひながたです。

私たちは教祖が通られた、その時その時の個別の道を手本として通るのはもちろんとして、ひながたの道全体を俯瞰的に捉え、どんなことが起きても諦めることなく、根気よく丹精し続けられた教祖の御心を汲み取らせていただき、お互いにしっかりと心に治めたいと思います。

また大祭のお言葉で、これからの具体的な取り組みについてもお示しく下さいました。私たちは教祖の道具衆である自覚を持ち、教祖の御心に溶け込み、御心通りに素直に実行して、たすけ一条に励むことが使命であるとした上で、一人でも多くの人をこの道に引き寄せさせていただく努力と共に、その人たちが道具衆の自覚をもって教えを実行できるようになるまで、辛抱強く心を掛けていくこと、そして既にようぼくになってはいるが、今一旦休憩している人も、ようぼくの自覚をもって動いてくれるように、導き続ける努力も疎かにしないようにとご教示下さいました。

そして、この年祭活動が盛り上がるようになればと思っていると、ご自身の思いをご披露くださったのです。年祭活動を盛り上げるとは、お祭り騒ぎをすることではありません。今の時旬を活かして、たすけ一条の道の上に勇んだ姿を御守護いただくことです。そのために、一人でも多くの人に声を掛けて、にをいがけとおたすけに努力する。そして人だすけのできるようぼくへと、辛抱強く導く丹精をすることを促して下さいました。

にをいがけもおたすけも修理丹精も、やろうと思えばすぐにでもできることですが、かといってすぐに結果に表れるものでもありません。だからこそ教祖がなされたように、諦めることなく続けていくことが大切になるのです。

お互いに根気よく、辛抱強く、諦めることなく旬の御用に励ませていただいて、真柱様のお心にしっかりとお応えさせていたいただきたいと思います。

皆様方のこれからの心勇んだ、そして粘り強いご丹精をお願いいたします、今月の挨拶とさせていただきます。

(要約)

立教百八十六年 十一月 月次祭 祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長に代わり井筒敏成、慎んで申し上げます。

親神様には世界一れつをたすけたいとの深い思召から、十全の御守護にお護り頂き、大難は小難、小難は無難へとお導き下さいまして、節から芽が出る道へとお連れ通り下さいます親心の程は、誠に勿体なく有り難き極みでございます。

私共は賜る御恵みに感謝の意を捧げて、日々御恩報じに努め、時旬の道を心勇んで歩ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおちばより当大教会にお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをぞりを勇んで勤めて、十一月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には今日を大切な一日と参り集いました芦津の道の子達が、共にお歌を唱和して、ひとつ心に勤める真心の状をも嬉しくお受け取り下さいまして、親神様にもお勇み下され、たすけ一条の道の更なる進展を御守護下さいますよう御願ひ申し上げます。

私共をはじめ芦津に繋がる教会長、ようぼくは、ひながたの道を以て教祖がお示し下さった教えを素直に実践することを改めてお誓ひ申し上げて、にをいがけに励み、おたすけに真実を尽くし、共に道を歩むようぼくを一人でも多く育て導けるように、根気よく粘り強く丹精を続けて参る所存でございます。

何卒、大いなる御心に私共の成人をお見守り下さいまして、たすけ一条の喜びに溢れる日々を御守護下され、陽気ぐらし世界の実現に向けて力強く進ませて頂けますようお導きの程を、一同と共に慎んで御願ひ申し上げます。

《11月月次祭 神殿講話》

教祖年祭に向け、おたすけと丹精、
尽くし運びの熱心を重ねよう

役員 岩切正教

還暦を迎えて

私事ですが、本年9月に還暦を迎えました。誕生日のその日、「これまで無事にお連れ通りくださいまして、本当にありがとうございます」と、神様に心の底からお礼を申し上げたのです。それはなぜかと申しますと、私の父親が還暦祝いするとき、「学生時代、当時、不治の病と言われた肺病、いわゆる結核の身上で1年ほど床に伏した。このままではたすからないと思ひ、思い切つて布教に出た。地元島原の駅で、毎日路傍講演をした。そうやって結核の御守護を頂いた。そして、どうかお願いですから60歳まで生かしてくださいと神様に懇願した。それが、こうや

って皆様には還暦を祝っていただけた。こんなありがたいことはない」と涙ながらに語っていたことを思い出したからです。

おそらく父は、長生きしない、40歳までに身上をお返ししなければならぬと悟っていたのだでしょう。もともと、岩切家の信仰は、男子が早死にする、結婚しても若死にする、いわゆる後家いんねんを悟つて信仰の道に入りました。

初代会長は、鹿児島出身で、17歳のときに結婚し、その3年後には主人と死別しました。その後、大阪に出て、紬つむぎの商いをする中、26歳で再婚するのですが、その主人も初代が34歳の時に直してしまふのです。

再婚した主人の身上から、眞明

組の先生方がおたすけに來られていたのですが、そのとき後家いんねんを論されました。すると、鹿児島島の岩切家の身内、親戚、縁者には13人も若くして後家になった人がいて、このままでは家が絶えてしまふと悟つた初代会長は、主人出直しを機に、「人をたすけて我が身たすかる」との御教え通り、運命を切り替えるべく、島原へ布教に出たわけです。

その信仰のおかげにより、二代会長である曾祖父は73歳まで、祖父は76歳まで、父は75歳まで生かしていただきました。

今の時代、75歳と言えば、平均年齢に満たないわけですから、「早かったね」「お元気だったのに」「あなたに体格が良かったのに」とよく言われたのですが、本来40歳を前に出直さなければならぬ運命からすれば、信仰のおかげで、35年も長生きさせていただいたのです。

振り返ると、運命を変える道を初代が通り切ってくれたんだと、

改めて御礼を申し上げた次第です。60歳になったこの節目に、先のこととは分らない、だから、今頑張るしかない。先のことをいくら考えても仕方がない。後に続く人たちに何を残せるだろうか。しっかりと信仰の道を繋いでいけるよう、元氣なうちに頑張ろうと、思いを新たにしました。教祖百五十年祭、立教二百年の両年祭まで元氣につとめたいと願うばかりです。

いんねんの自覚

人生において、喜ばない節は人間、誰でもあるはず。しかし、降りかかってきた予想もしないことに対して、その場で解決しようと焦つても、いんねんなら解決することはできません。「いんねんならば通らにゃならん、通さにゃならん、通つて果たさにゃならん」と、絶対通らなければならぬ、避けて通れないと仰つておられます。

たんのうしか前生のいんねん果たしができないわけですから、あ

りのまます直に受け入れて喜びを見出せなかったら、依然としていんねんが残ってしまいます。

だから、元一日を知り、いんねんの自覚をするという、お道の信仰はありがたいと思うのです。

私には、父親が結核だったので肺を患ういんねんがあります。祖父も父親も脳出血・脳梗塞で倒れました。脳疾患といういんねんもあります。二代会長は、19歳まで親の顔を知らずに育ちました。家族の縁の薄いいんねんもあります。教会を出なければならぬといういんねんもあります。さらには、

後家のいんねん、掘り下げれば、もつともっとたくさんいんねんがあると思いますが、信仰の元一日を知れば、いろいろな節も、喜びに変えることができるのです。

「この出直しは、家や教会が伸び栄えるため、早く生まれ変わってきて、新たな役割が担えるように、出直しさせてくださったのだ」この身上は、心を一つにするために見せてくださったのだ」この事情

は、親一条の信仰を見失わないように勇ませてくださったという」と、喜びの方向に道を変えるから、「よくぞ通ってくれた。親の心を理解してくれた」と、いんねんを一つ切ってくださいののだと信じています。

尽くしてたすかる道

教祖百二十年祭の頃ですが、私どもの信者さんの娘さんが乳がんになりました。結婚して3年目のことです。

主人との出会いは、実家の母親の友だちの紹介で、縁談のとき、「いろんな苦労はあると思うが、お金には苦労しない」と勧められて、結婚したわけです。主人は男3人兄弟の長男であり、結婚した翌年に子供を授かりましたが、お乳を患う病気になってしまったのです。いわゆる、母乳を作る組織にしこりが出来て腫れ上がり、母乳を運ぶ管が圧迫されて塞がってしまうといった乳腺症・乳腺炎という病気にかかってしまったので

す。

パンパンにお乳が張って、夜も眠れないほど毎日毎日激しい痛みが続いたのだそうです。子供を無事出産しましたが、生まれてからも痛みは続き、子育てをしながら母乳が詰まらないように、夜も2時間おきにお乳を絞っていた。ですから、満足な睡眠もとれず、体は痩せ細っていくばかりでした。

そんな毎日を送っていたのですが、実家の母親からおさづけを取り次いでもらうと、その痛みがスーッと取れる。その不思議なお働きを肌を感じながら、半年過ぎた頃には、痛みもなくなっていたのだそうです。

お乳の痛みも消えて、普段の生活ができるようになりました。そうこうしている間に、2人目の子供を授かりました。すると、またお乳が腫れてきて、激痛が襲うようになったのです。もう二度と子供は産まない、そう決めて、定期的に病院で受診していたのですが、半年後、乳腺の病気に加えて、乳

がんも見つかったのです。

それからというもの、お乳の痛みと、乳がんで、不安が募るばかりの毎日でした。おなかに子供がいますので、手術はもろんのこと、薬物の投与であったり、放射線といった治療はできないと、本人がそう思ったからです。

放っておいたら、乳がんは大きくなっていく、転移したらどうしようという不安が日に日に増して、「もう無理、この悩みにこれ以上耐えられない、どうしたらいいか、たすけてもらいたい」と相談があったのです。

「尽くしてたすかる道」と聞かせていただきましたが、神様に無理を聞いてもらうためには、つくし運びしかないので。待ってられないからです。それで、「乳がんの手術にかかる一切の費用を神様に運ばれてはいいかがでしょうか」と相談をさせていただいたのです。

すると、「分かりました」と了解してくださったのですが、本人にはお金がありません。そこで、主



人に相談することになり、「神様に治してもらおう」と言うと、「何を馬鹿なこと言ってるんだ」と怒られる始末で、その主人は、お参りをしたり、おつとめをすることには理解してくださいますが、お供えのことに關しては、「なぜお金が必要なんだ」「お金と神様と、どんな関係があるんだ」「お供えすれば、本当に治るのか」と、お供えに否定的な言葉を並べて、奥さんを叱りつけたのです。

今も、お供えについては、快く思っておられませんので、陰で、その娘さんは神様に繋いでおられますが、当時はものすごく批判的

膿がすべて出た

でした。
しかし、2、3日夫婦で悶々とした日を送り、もう子供を諦めよう思ったとき、主人が、「これで足りるか」とお供えを持ってきたのだそうです。

おそらく、奥さんが入院したら、子供の面倒が見られない、仕事にも行けない、やっていけないという心配から、主人も神様に頼るしかなかったのだと思います。

その家族を思う心が嬉しくて、主人が用意してくれたお金に加えて、自分が持っていたわずかなお金と貯金を、全部お供えしてくださいました。すると、あれだけ痛かった胸の痛みが、嘘のようにスーッと消えたことでした。

そして、お供えしたその日から、心臓の真上がかゆくなったんだそうです。かゆいところをよく見てみると、皮膚の表面が剥がれていくというか、だんだん膜が薄くなっていったことでした。そう

して、お供えして1週間ほどしてからでしうか、夕飯を作っていたら、シャツが真つ黒になつていったんだそうです。それで、慌てて服を脱いで見たら、心臓の真上、かゆかったところから真つ黒い膿が心臓の鼓動に合わせて、ドクドクと吹き出していたのだそうです。その量は、ティッシュを1箱使うほどで、いつになったら止まるのだらうと思うほどの量だったのです。心臓の上の皮膚が薄くなって、3ミリほどの穴が空き、勝手に中の膿が吹き出したのです。

翌日、病院に行ってみると、不思議なことには、お乳の腫れはなくなつており、さらに不思議なことには、乳がんのしこりもなくなつていたことでした。全部きれいに出てしまったのです。神様のお働きは凄いなと御守護を実感したとのことでした。

それ以来、神様一条にもたれて通りますと心定めて、毎日を通っておられます。

この「もたれる」とは、壁にも

たれる、椅子にもたれるのとは少し意味が違います。「医者にもたれる」とは医者言う通りにする、というように、「もたれる」とは「言う通りにする」ことを意味します。が、一生、神様の仰せのままに道を歩ませていただきます、と心を定めておたすけに勇まれているのです。

そして、家族、親戚、みんな幸せになつてもらいたい、徳を積んでもらいたいという一念から、主人、子供2人、自分の兄弟、いとこに至るまで、全員の分を自分が負担して、それぞれの名前で、毎月欠かさずにお供えをされているのです。

また、今では病氣や事情で困っている人から相談を受ければ、まず先に自分が10万円の理立てをし、おたすけに通われています。

そうやって、神様にもたれておたすけに励みながら、いんねんを切る道を歩んでおられるのです。

良いことでも悪いことでも、自分の蒔いた種が生えてきて、その

生えてきた運命の上を通るのが、
私たちの人生の決まりです。です
から、尽くしてたすかるといふの
は、親のため、世のため、人のた
めに、自分を忘れてつとめたこと
が、自分がたすかることなのだと
思うのです。

人の幸せを願う心

このたびの教祖百四十年祭三年千日の年祭活動のテーマの一つに、年祭を知ってもらう、そして一人でも多くの方に年祭活動に参加してもらうことが掲げられています。

その上で真柱様は秋季大祭の折、
教祖は、五十年もの間、どんな
ことが起こっても諦めることな
く、丹精し続けられたというこ
とを、これもひながたとして忘
れてはならない……

とお示しかったです。

教会のようなく、信者さん、そしてご家族や教友の方々に何からでも始めていただけるよう、心を掛けて丹精したいと思います。

さらには、

教祖のお心に溶け込んで、教祖のお心通りに素直に実行して、たすけ一条に励ませていただくことが使命であることを、あらためて確認し合いたい……

と仰せられました。が、教祖の御心というのとは、私たち人間を思う心です。人間の幸せを願う心だと思えます。執着を去れば、陽気ぐらしを味わうことができるわけですから、金、物、人にこだわるということこだわりの捨てて、水のようにサラサラと、またすつきりとした「なつても結構、ならいでも結構」と、広い大きな心で生活すること、を、教祖は陽気ぐらしという言葉で教えてくださっていると思います。

どうか、ただ今は、教祖にお喜
びいただくための、ありがたい成
人の句をお与えいただいています
ので、おたすけと丹精、尽くし運
びの熱心を重ねていただき、御用
の上に尽力賜りますようお願い
申し上げます。

十一月月次祭

祭典役割

[illegible]

喜びの奉告祭

五代会長就任奉告祭

浪華浦分教会

稗島部属・浪華浦分教会（兵庫
県川西市）では、11月11日、大教
会長をお迎えして、高馬文典五代
会長就任奉告祭を執り行った。

浪華浦の道は、昭和3年に木口
庄五郎を初代会長として大阪市西
淀川区花川にて理のお許しを戴い
たが事情教会となり、昭和48年に
復興するも再び事情教会のやむな
きに至った。その後、昭和59年に



高馬将男が三代会長として現在の
地にてお許しを戴き、現在に至る。

午前11時、高馬会長の祭文奏上
に続いて、大教会長が挨拶。「陽
気ぐらしの道場に近づくために、
自分たちにできることを実践して、
教会に來ただけで心が明るくなる
教会を目指してほしい」と期待を
述べられ、「新しい会長を志に、し
っかりと肉を巻くべく心を寄せ合
つて、一手一つに成人の歩みを進
んでもらいたい」と望まれた。最
後に高馬三博前会長に対して、親
の声を頼りに務め切られたことへ
の敬意を表された。

一手一つにおつとめを勤めた後、
挨拶に立った高馬会長は、「二代統
いて親子で会長を交代できたこと
は本当にありがたい。親から子へ
信仰を伝えるべく、おぢばに心を
繋ぎ、ちば一条、親一条の精神で
御用に励ませていただきます」と
決意を述べた。

その後記念撮影をして、直会。
笑い声が絶えず、終始和やかな時
間を過ごした。
参加者は37名であった。

布教キャラバン隊

全日程を終える

9月30日の鹿児島ブロック開催
から始まった、教会長夫妻、後継
者夫妻が対象の「布教キャラバン
隊」が、11月12日近畿ブロック、
11月16日北海道ブロック、11月29
日和歌山ブロック、12月3日の奄
美大島ブロックを以て、全国8カ
所、全10回の開催が終了。

全日とも路傍講演や神名流し、
戸別訪問などのにいがけ実動を
行ない、またグループワークでは
活発な意見交換が行われた。

教務支庁を会場に行った和歌山
ブロックでは、短時間にお話を3
件も取り次ぐ方や、インターホン
を押してのポスティングをやめて
歩いている方に直接声を掛けてリ
ーフレットを渡す人もおられ、「経
験豊富な方と戸別訪問に廻ること
でいろいろアドバイスしてもらい、
大変勉強になった」などの感想が
寄せられた。

大島分教会を会場に行った、奄
美大島ブロックでは、グループワ
ークを行った後、にいがけドリ

ルを行ない、その後、2、3人組
に分かれ、戸別訪問を行った。ま
た、前日には希望者で路傍講演を
行った。

参加者からは、「年祭活動中に勇
ませてもらい、ありがたかった。
これから少しずつでも自分にでき
るにいがけに動かせてもらいた
い」と勇んだ声が聞かれた。

参加者は、近畿ブロックは14名、
北海道ブロックは13名、和歌山ブ
ロックは23名、奄美大島ブロック
は26名であった。



グループワークの様子（奄美大島ブロック）

立教186年 婦人会荻津支部総会開催



11月24日、婦人会荻津支部（井筒年子支部長）は、大教会で「婦人会荻津支部総会」を開催した。コロナ禍による中止の後、この2年間は対象を絞り、人数を制限しての開催だったが、4年ぶりに従来の形に復しての開催となった。参加者は240名。

午前10時より第1部おつとめを



14交替で勤めた。

第2部式典は、最初に「諭達第四号」を拝読し、開式の辞、会務報告。婦人会本部からの祝辞を井筒支部長が代読し、続いて挨拶。「教祖百四十年祭に向かって、根気よく丹精し続けましょう」と促された。

続いて大教会長が挨拶。秋季大祭の真柱様のお言葉を元に、「ようばくを引き寄せ、育てることが世界たすけの教えに应える道」と示され、そのために粘り強く努力をしてほしいと激励された。そして、「親神様の御守護がありがたい、教祖の親心が嬉しい、それを伝えることがにいがけ。みちのだいとして、にをいがけ・おたすけに勇んでいただきたい」と話を締めくくられた。

誓いの言葉に続いて婦人会歌を斉唱し、閉会の辞をもって式典を終了した。

第3部は会員による感話。小坂マ



会員による感話

リア・ロサリンダさん（吹櫻委員長）と福岡道代さん（奄美笠委員長部）の2名が自身の体験談を語った。最後に新たに任命された委員長部長の紹介があった。その後、食堂で会食。過去の年の祭の歌を歌うなど、和やかで楽しい時間を過ごした。

女子青年着付け勉強会

11月25日、婦人会荻津女子青年（北村はぎ乃委員長）は、詰所で「着付け勉強会」を開催。女子青年6名と婦人会女子青年担当者3名が参加した。



おつとめ衣を着ながら着付けのポイントを学ぶ

午前10時より、修養科棟修練場で着付けの勉強。婦人会担当者が講師となり、実際におつとめ衣を着ながら、着付けの際のポイントを学んだ。

その後、ご本部のお願いづくめに参拝し、昼食。午後からは、再び修練場で帯の結び方を詳しく学んだ。

参加者からは、「なかなか教えてもらう機会のないことなので、とても勉強になりました。一人できれいに着ることができるようになりたい」などの感想が聞かれた。

第97回青年会総会

11月25日、本部中庭で「第97回青年会総会」が開催され、芦津分会からも大勢の青年会会員が参集した。

式典では青年会長様の御告辞を拝聴。青年会長様は「心を澄ます毎日を。」との基本方針に沿って、ほこりを減らし、誠を増やすことの大切さを伝えられた。その後、真柱様のメッセージを中田表統領が代読。会員は言葉に心に治め、今後の勇躍を誓った。式典後、芦津分会はご本部のお願いとともに参加し、詰



所に戻り、2階大広間で2人1組となつて対話を行った。

また、同日の夕づとめ後に東西泉水プール前で開催された後夜祭で、芦津分会は焼き鳥を出店。わずか50分で500食を完売する、盛況ぶりであった。

大島分教会
ファミリィおつとめの集い

大島分教会(加世田洋会長)は、11月中に大島分教会をはじめ、部内教会、布教所、講社など8カ所で「ファミリィおつとめの集い」を開催した。コロナ禍以降は分散して集いを開催しているが、今回は初めて詰所での開催が実現した。

11月3日は、大島分教会で開催。座りづとめ よろづよ八首の後、大教会長からのお祝いのことを森誠一朗育成部長が代読。「年祭活動は、日々教祖のひながたを目標に、生活の中で信仰を実践し、人だすけに励む旬。そのために教祖はおつとめおさづけをお教え下さった」と、つとめと

さづけの実行を促された。次に加世田会長のメッセージを読み上げた後、少年会員の門出式を行った。

11月26日には、詰所修養科修練場で開催。関西在住の大島に繋がる信者家族が大勢集まった。

全体での参加者数は、少年会員36名、育成会員101名であった。



11月3日は大島分教会で開催

吉野川分教会記念団参

11月26日、吉野川分教会(宗我道明会長)は「創立130周年記念おちばがえり」を実施した。

ご本部11月次祭終了後、



東礼拝場前で記念撮影

参加者は東礼拝場に集合。吉野川に繋がる教会長、ようばく、信者約170名が宗我会長を芯にお礼のおつとめを勤めた。東礼拝場前で記念撮影、本部食堂で昼食の後、各自で詰所へ移動し、午後2時より大広間で記念講演を行った。

初めに世話人・井筒文夫役員が挨拶。続いて二宮勇三氏(大阪教区書記・大江部属三机分教会教人)を講師に迎え、自身の布教体験に基づいた講話を拝聴した。

最後に宗我会長が「今一度名称の元一日を胸に刻み、今

日までの御守護に御礼を申し上げると共に、教祖百四十年祭に向けて一手一つに務めさせていただきたい」と決意を語った。

教会長登壇参列《11月》

坂井 豊郎(南向)
西窪トシ子(東淀川)
橋爪 徹弥(日幡)
竹内 義忠(稗島)
竹内 嘉彦(福)
林 茂之(鷺洲)
北村 浩(芦姫)
高馬 文典(浪華浦)
田中 武(順世)
瀬戸山真美(照南)
川畑 祝子(薩州)
岩崎 勝二(白野江)
加藤千代美(丸芳)
永吉 輝代(大真永)
大喜 信人(真大富)
吉田 昇(周宝)
瀧本 晶子(日名南)

以上17名

直 属 巡 教

本年も1月、2月に直属教会へ巡教が実施され、教祖百四十年祭へ向かう年祭活動2年目の大教会の活動方針の徹底が図られる。

巡教員、巡教先は次の通り。

大教会長 日方・本津・甲邊

・紀周・兵庫眞洲

・本明勇・本氣

井筒文夫 島原・稗島・沖繩

・真明彰化・真伯

湯川正園 東津・日高

瀧本眞二郎 島下・和鎮

岩切正教 直轄・門司・四ツ山

川畑澄博 津和・天保山・芦浪

奥田眞治 始良・青木・入江

竹内義忠 芦華・明道・芦明德

山本義範 尼崎・芦東

山田道弘 大島・大冠・天津

加世田洋 豊野・勝明・神の島

岩切正義 吉野川・當別・

芦明照

瀧本庄司 靱・芦ノ郷・神滝本

事情はこび

立教186年11月26日お許し

紀船分教会

移転

和歌山県海南市船尾276番地

より

和歌山県海南市船尾260番地141

へ移転

鎮座祭 立教187年1月20日

奉告祭 立教187年1月21日

教務部報

教養掛 (9月〜11月)

教養掛主任

加世田 洋

教養掛

中村 俊和・水田 秀秋
川畑 正博・梅本 理弘
望月 恵美・宗我 邦代
荒木 和子

教会長資格検定合格

坂井 豊昭 (南 向)

加藤 仁 (鳥 栖)

立教186年11月16日教会長資格

検定講習会第136回を修了し、

翌17日検定合格されました。

教人資格講習会第136回修了

村山 浩子 (東大屋)

立教186年11月10日

修養科第987期修了

井筒たつえ (直 轄)

藤本 豊子 (四ツ山)
田中 宣次 (芦 玉)
信坂 幸 (大眞永)

立教186年11月27日

おさづけの理拝戴《10月》

端野 隼人 (吉野川)

湯川 春子 (直 轄)

森 貴志 (芦 南)

孫 秀子 (真明新營)

黄 麗絲 (真明新營)

黄 美娟 (真明新營)

《拝戴日順 6名》

初席《10月》

《3名》 真明彰化、真明新營

《1名》 美三、大正町、鳥栖、

鎮名

《順序運びより 10名》

お詫び・訂正

真明647号「教務部報」

おさづけの理拝戴《9月》

森山 善大 (大眞永)

は、

森山 善大 (芦 南)

の誤り。お詫びし、訂正いたします。

月 例 統 計 (自令和5年1月1日〜至令和5年10月31日)

項 目	初	の	修	教
名 称	席	理さ	養科	人
() 内教会数		拝づ	修了	
大 教 会	(1) 10	10	2	
靱	(13) 2		1	
東 津	(23) 1	1	1	2
吉 野 川	(29) 3	1	2	
島 原	(16) 7	2	1	2
日 方	(15) 3	1	2	4
稗 島	(7) 4			
本 津	(2) 1			
日 高	(2) 1			
始 良	(5) 3			
津 和 司	(6) 3	2		2
當 別	(6) 17	4	2	
大 沖	(3) 1			
尼 崎	(2) 1			
四 ツ 山	(5) 1			
大 冠	(2) 1			
島 下 山	(1) 1			
天 保	(3) 1			
青 木	(1) 1			
芦 浪	(1) 1			
甲 邊	(1) 1	1		
芦 華	(1) 1			
天 津	(1) 1			
入 江	(1) 1			
豊 野	(1) 1	1		
紀 周	(3) 2	2		
勝 明	(1) 1			
神 の 島	(1) 1			
兵 庫 眞 洲	(1) 4			
芦 ノ 郷	(2) 2			
本 明 勇	(2) 1			
明 道	(1) 1			
芦 東	(1) 2	2		
和 鎮	(3) 2	2		
神 滝 本	(1) 1			
芦 明 徳	(1) 7	3		1
真 明 彰化	(2) 1			
本 氣	(2) 1			
芦 明 照	(1) 1			
真 伯	(1) 1			
合 計 (209)	75	31	11	11